

もう「被爆地」を増やさないために

ブーチン大統領の「核による恫喝」で、国際社会ではより強固な核抑止論を求める声が強まった。だが、核抑止とは根本的に核戦争の防止に役立つのか？という疑問も浮かび上がった。判断の合理性をめぐる核抑止論の脆弱性が、より切迫した形で焦点となったからである。そもそも人類が目指すべき「核のない世界」の対極にある核抑止論から、世界はいかにして脱却できるか。被爆地を絶対に増やさないための、新たな脅威への対策とは。



迫りくる核リスク
 〈核抑止〉を解体する
 吉田文彦・著
 岩波新書 / 990円

中国が覇権を目指すなか、日米豪印を基軸国とするインド太平洋の国々は、自由で開かれた国際秩序を守ることができているのか。インド太平洋に関する取り組みを、いかに第三国に広げ、支持を取り付けることができるのか。本書は、地政学の発想に基づいて、故安倍晋三元首相が提唱したインド太平洋の現実を一〇の国と地域の視点から検証し、英ラウトレッジ社から刊行された書籍の邦訳。安保三文書が改定された今こそ読みたい大書だ。

世界のインド太平洋規範と価値と地政学



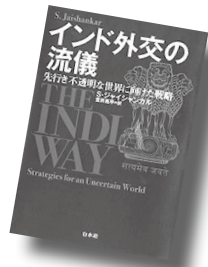
インド太平洋戦略
 大國間競争の地政学
 プレンドン・J・キャンノン / 墓田桂・編著
 中央公論新社 / 3080円

国際関係の真の理解に
 なぜ歴史学が必要なのか



国際関係史の技法
 歴史研究の組み立て方
 マーク・トラクテンバーグ・著
 村田晃嗣 / 中谷直司 / 山口航・訳
 ミネルヴァ書房 / 3520円

歴史学に奥義はない——著者は軽妙な語り口で、政治科学者を国際関係史へと誘う。歴史学の手法を知らずして、国際政治を理解することはできないからだ。太平洋戦争の開戦という「専門外」のテーマによる著者自らの実践に、読者は歴史家の思考過程をリアルに追体験できる。訳文は明快であり、本書の議論をもとに歴史研究の役割を見つめた訳者解説も必読。巷に溢れる「歴史書」を読む時にも、本書が説く技法を意識したい。



インド外交の流儀

先行き不透明な世界に向けた戦略
S・ジャイシャンカル・著／笠井亮平・訳
白水社／3630円

非同盟から離陸するか インド外相が見る「世界」

「グローバルな状況によってインドは自国の外交目標をそれまでとは異なつたかたちで概念化する必要に迫られた」。S・ジャイシャンカル外相はこう語る。氏は、ロ・米・日など四〇年の外交官生活から、インド独自の歴史観や価値観を析出しつつインド外交の未来を展望する。インド外交はついにネルー路線から脱却し、非同盟路線の殻を破ることになるのか。台頭めざましいインドは、何を考え、どこへ進むつもりになっているのか。

占領下日本という 「戦後」政治 の原点



語られざる占領下日本

公職追放から「保守本流」へ
小宮京・著
NHK出版／1760円

一九四五年夏「戦後」が始まった。「戦後」の起点には占領下日本という現実があり、その中で生き残りや勢力拡大を図ろうとする「暗闘」があった。著者は現在においても本格的な検証が不足していた分野に斬り込む。本書は公職追放回避を渴望する政治家たちの暗闘や、「保守本流」が作り上げられた過程を暴露する。それは占領下日本から現在に至るまでの日米関係、いわば「戦後」日本の起点を描き出す作業である。

近代の画一化がもたらした 「港町」の多様化と盛衰

港町巡礼

海洋国家日本の近代
稲吉晃・著
吉田書店／2860円



帆船が担った沿岸航路の拠点として各地に点在した近世の「湊」から、世界につながる蒸気船ネットワークと内陸を結ぶ鉄道の中継点としての近代の「港」へ――。中央政府による急速な国家統合、国家の内外を越境し集積される人・物・情報との関わり方で、各地の運命は大きく分岐していった。本書は、一五の港町をめぐる中央の政治外交と地方社会の相互作用を描き出し、グローバル社会を生きたる現代日本の姿も浮き彫りにする。